

## 哲学対話:精神保健看護の立場から闇バイトの背景にある問題を語ろう！ ーアディクションの視点からー

○福嶋 美貴<sup>1)</sup>、磯野 洋一<sup>2)</sup>、今泉 源<sup>3)</sup>、小野坂益成<sup>4)</sup>

1)中部大学 生命健康科学部 保健看護学科、2)金城学院大学看護学部看護学科、  
3)名古屋市立大学大学院看護学研究科、4)松蔭大学看護学部看護学科

目的：闇バイトというタイムリーな現象から、その背景に存在するであろう「アディクション」を中心としたキーワードから自由に考え、精神保健看護からどのような支援があるか抽出する。背景：昨今、ごく普通の青年が、一般のアルバイトを装った闇バイトへの応募から、意図せず反社会的組織にとり込まれ凶悪犯罪に手を染める。このような目を覆いたくなるニュースが巷に溢れるようになりました。その中で金品の搾取という目的のために何よりも重い人命が軽視され、尊厳のみじんもなく奪われていることに愕然とする人も多いと思います。一見、短絡的で衝動性のコントロールが弱い若者が増えたように映ります。その背景には複合的な問題があると言われています。社会学的な問題として、相対的貧困、そして、闇バイトでは携帯電話やSNSの掲示板、秘匿性の高いアプリ等を駆使して実行されることから情報リテラシーの問題があります。これらの問題のさらに深い部分に、私たち精神看護に携わる者が認識しなければならない「アディクション」の問題が潜在しています。先ほど、相対的貧困というワードをご紹介しましたが、闇バイトに応募する若者の中には、「今日、明日食うにも困る」という生活困窮者ばかりではないケースもあります。それは行き過ぎた消費活動です。消費ではなく浪費、濫費とも言えるお金の使い方です。ゲームでの課金、推し活に代表されるホスト通い、アイドルの追っかけと投げ銭などなど。勿論、ゲームや推し活に肯定的側面が全くないと言うことではありません。しかし、収入の範囲内で無理なく健全に使う事から逸脱しがちで

す。「わかっちゃいるけど、やめられない」という状態に、いとも簡単にはまってしまうリスクを誰もが負っているのではないのでしょうか。巷にモノも人も情報を溢れ返り、誘惑に満ちています。選ぶのは紛れもなく自分自身です。でも私たちは、「状況の中の人」なのです。本ワークショップの流れ：まず哲学カフェの説明をします。そのあと闇バイトの背景にある問題を「アディクション」のキーワードから考えていきます（勿論、その他のキーワードから考えを深めることも可能です）。当日はこれらに関するデータや闇バイトに関与してしまった若者の事例などをお示しし、話題提供とします。グループディスカッションに移り、精神保健看護からどのような支援があるかのきっかけにして頂く。その後まとめをして、終了とします。参加の呼びかけ：臨床の看護師など専門職者、教員、研究者、学生そして「私、アディクションに陥る気持ちわかります！」という方などの参加も歓迎します。哲学カフェは身近な問題を深く考える場です。話題提供から思ったこと、感じたことを忌憚なくご発言ください。ルールは、何を言っても良いが、人の発言を否定しない、聴いているだけでもよい、経験に則して話す、途中退席自由の5つです。本学会の事業内容のひとつに、「人々の精神の健康と福祉に貢献するための社会的活動」が記されています。どうか、闇バイトに関与した若者を個人の問題として切り捨てるのではなく、フローレンス・ホリスの理論にある「状況の中の人」としてとらえ、精神の健康と福祉、つまり Well beingと一緒に考えましょう。